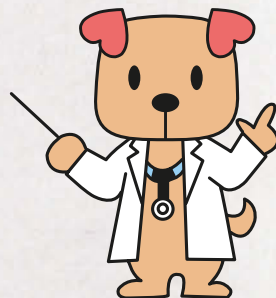


こころ の 健康

「発達障害」について

千葉県立青葉病院 しのだ なおゆき 篠田 直之 医師

最近、「発達障害」が増えていると言われています。疫学的に実数が増加しているのかどうかは分かりませんが、病院を受診する人は明らかに増えています。病院で診断される代表的な発達障害としては、注意欠如多動性障害（ADHDと略されます）、自閉スペクトラム症（自閉症、広汎性発達障害、アスペルガー症候群など呼び方はいろいろあります）、学習障害（書字障害、読字障害、算数障害などのタイプがあります）などが挙げられます。



これらの発達障害は、うつ病や統合失調症などの精神疾患とは異なります。「発達障害」とは、脳の神経ネットワークの発達の仕方に特徴があり、脳機能の発達がでこぼこしているということの意味しています。得意なところと苦手なところの差が大きいとも言えます。極端なことを言えば、誰でも「発達障害」を持っているのです。大多数の人は似たような脳の発達経過をたどりますが、発達のでこぼこの目立つ方と明確に区別することはできません。スペクトラムとって、連続性のあるものとして考えられています。どこから「障害」として考えるのかは曖昧なのです。

ただ、「発達障害」の目立つ方は社会の中で苦労することも多く、教育的・社会的支援が必要になることがあります。医学的に発達障害の診断が下されないと支援が始まらないということはありません。本人が生活しやすくなるための支援はいつから始めても良いのです。人の脳は歳を重ね発達を続けますので、「発達障害」の方も当然脳は発達し、できるところは増えていきます。自分の得意なところをたくさん伸ばした方が自信もつくし、それに合わせて苦手なところも自然に伸びていくのだと思います。逆に「障害」を取り除こうとして躍起になったり、苦手なところばかり鍛えようとしたりすることは、結果として本人の自尊感情を損なってしまう恐れがあります。できるところを、興味のあるところを伸ばすことが肝心だと思います。